中里介山「大菩薩峠」の文体

――改稿による地の文の変化を手がかりに

崔（チェ） 惠秀（ヘス）

はじめに

中里介山の「大菩薩峠」は近代日本における大衆小説の先駆けとして評価され、多くの論者たちの興味を引いて来た。しかし、これまで『都新聞』に連載された初出のテクストや単行本化の際に行われた改編内容については詳しく論じられたことが無く、単行本版、そのうち筑摩書店から刊行された全集や文庫本など、現在広く流通されているテクストのみが研究の対象になって来た。ようやく二〇一三年五月、伊東裕吏氏による評論『大菩薩峠を「都新聞」で読む』（論創社、二〇一三年五月）や都新聞版「大菩薩峠」の単行本（論創社、二〇一三～一五年）が刊行されたにも関わらず、伊東氏の論は内容削除の面のみを分析しており、初出や単行本版における文体上の相違に注目した研究は未だにない。

このような現状から、本稿では従来「講談調」「です・ます体」などの簡単な言い方で評価されてきた「大菩薩峠」の文体が、「都新聞」連載過程のうちに変わりつつあったことに注目し、改編内容を含めてその変遷過程を追ってみる。そして単行本化の時の改編作業がストーリーの変更だけでなく、文体の変更をも目的としていたことを明らかにし、「た・である」によって完成されたと言われる「近代文学」の文体に照らし合わせながら、その意義を考察してみる。

本論に入る前に、前提としていくつかの情報を確認して置く。（本稿末尾の【表】参考）『都新聞』での連載は一九一三年に始まるが、一九一八年から介山自身が「玉流堂」という出版社を建てて初の単行本版を刊行する。そのあと、一九二一年以降単行本版は春秋社から出るようになるが、玉流堂からの本文異同はない。また、一九二七年から同じく春秋社から刊行された普及版は誤字や脱字などを修正してはいるが、内容に関する修正はなかった。さらに一九三三年から介山自身が建てた隣人之友社から刊行された「大乗普及版」には、内容の修正はないが、読点を削除して句点を追加するなど句読点において修正が行われている。以上の版本の修正内容もこれから詳しく研究すべきであるが、今回は一九一〇年代の文体意識に焦点を当てるので、これ以上は触れないことにする。

次はデビュー作を含め、「大菩薩峠」の連載が始まる一九一〇年代前後に介山が書いた作品の文体情報を確認しておく。

①羽村子「氷の花」（『都新聞』一九〇九年一二月一八日～一九一〇三月四日連載）：読点なし、改行ほぼなし、敬体（＋常体）

②羽村生「高野の義人」（『都新聞』一九一〇年九月四日～一九一〇年一二月七日連載）：読点なし、改行ほぼなし、敬体（＋常体）

③中里生「島原城」（『都新聞』一九一一年五月四日～一九一一年八月一九日連載）：読点なし、改行あり、常体

④中里生「室の遊女」（『都新聞』一九一一年一二月一六日～一九一二年三月二一日連載）：読点なし、改行あり、敬体（＋常体）

⑤中里介山「文覚」（『都新聞』一九一二年一一月二七日～一九一三年三月一六日連載）：読点なし、改行あり、

雅俗折衷体

⑥石雲生「浄るり坂」（『都新聞』一九一六年八月六日～一九一七年三月一七日連載）：読点なし、改行あり、常体

右記資料で分かるように、介山は各作品ごとに異なる語りの戦略に基づいて色んな文体を使っていた。文体選択におけるこのような自由さは、介山が個人的に文壇の流行文体と自分の文体との差異を強調したいモチーフを持っていたことに起因する可能性もあるが、花柳界や下町の人を主な読者層としていた当時の『都新聞』の連載読物には様々な文体が混在しており、『都新聞』という特殊な媒体が持つ雰囲気もその要因として考えられる。

以上のことを前提に、本論では『都新聞』の初出とそれの単行本版の初出の文体を比較検討し、その結果、確認した四つの文体タイプを時代順に紹介していきたい。

一、第一期：口演速記体の時期（第一回連載「大菩薩峠」から第二回連載「大菩薩峠（続）」まで

【資料1－1】中里生「大菩薩峠」（三）『都新聞』一九一三年九月一四日

程なく、峠の頂に身を現はした年老いたる巡礼は、後を顧みながら／「やれ〳〵、頂上へ着いたわい、おゝ此処は観音様の御堂がござる、」／社の前へ歩みを移して笠の紐を解いて、跪まると／「お爺さん、此処が頂上かい」／子巡礼は、愛くるしい面立の、頬のあたりの血色もよく、元気もよく、老爺の傍に駈て来て、手に携へた一束の草花を、御堂の階段に供へて、笠の紐をとり、二人は首を地につけて、礼拝をすまし御詠歌を唱へた後（…）

（引用者注：（／）は改行を示す。以下同様）

右記引用の地の文には敬体現在形や過去形が使われているが、句点がないのでそれが独立した文章として成り立っているわけではない。また、引用の部分を含む一九一三年九月一四日の連載分全体を見ると、過去形に比べて現在形の方が二倍以上多く、過去形は主に物事の進捗状況に関する部分や話題転換の時に使われており、現在形は描写や事件に対する語り手の批評部分に集中されている。これは眼の前で起こっている外部的な事件や作中人物の様子を高座にいる語り手が詳しく伝えるふりをする話芸のようなスタイルで、語り手は時々「何という無残な事でしょう」などと同意を求めるような語り口で読者を誘う。このような文体は、円朝の速記物の伝統を引きつつ速記者を介さずに話芸が活字文化へ転進していた[1]一九一〇年代という時代のものでもあり、口演速記体の形式は当時の新聞読物、特に「都新聞」の読物には幅広く使われていた。

二、第二期：口演速記体に常体・過去形が増加した時期（第三回連載「龍神」から第五回連載「大菩薩峠（第五編）」

第一・二回の連載分は基本的に【資料1－1】に示しておいた例のような口演速記体のスタイルで書かれているが、第三回目連載、即ち一九一五年頃に至っては常体の割合が急激に増え、前とは異なる文体様相が窺える。

【資料2－1】中里生「龍神」（八十八）『都新聞』一九一五年七月三日

龍神の社には、八大龍王のうち、難陀竜王を祀る、／こんな山奥に龍神を祀ることが奇妙といへば奇妙である――今を去ること幾百年の昔この地に龍神和泉守といふ豪族が住んで居た、その屋敷あとは、今もある、／

龍神の姓は、その人以前からあつたものか、その人が来て、龍神の社の名によつて其の姓を付けたものか、その辺は、ハッキリしない、（…）一村の安否の鍵がそこに預けられてあるやうに信ぜられて居るのであります、／お豊は事実清姫の帯を見たのです、――聞いて見れば怖ろしい事であるどうやら其の怖ろしいものを見たのは、自分一人だけであるらしい、

右記引用【資料2－1】を含む一九一五年七月三日の連載分の場合、敬体は三回しか使われておらず、主に常体現在形で書かれている。それにも関わらず、敬体が混用されているため、語り手や読者両方の位相が不安定になっている。すなわち、地の文の敬体は明らかに作者と思われる語り手が読者向かって発する言葉である反面、敬体部分を除いては語り手が不明確なのである。例えば、「どうやらその怖ろしいものを見たのは、自分一人だけであるらしい」という文章では、語り手が作中人物であるお豊と完全に重なっており、それまで作品世界の外部に位置していた語り手がいきなり作中人物の中に入っている。つまり、語り手が作中人物の中に入ったり、外に出たりを繰り返し、一つの物語に複数の語り口が存在する具合だと言える。

こうした語り手や作中人物の同化は右記例のお豊のみならず、ほぼ全ての作中人物に対して行われている。このような常体使用は、敬体が混用されている点から考えると常体を使う文壇文学からの影響というより、ウォルター・J・オングのいう「声の文化」の特徴で、語り手は対象とうっかり一体になるなど、「感情移入的あるいは参加的であり、客観的に距離をとるのではない」という声の文化における表現の特性に該当する[②]。常体と敬体を混用するこのような基調は第二回連載「大菩薩峠（続）」から始まって第三・四回連載で最も目立ち、第五回連載「大菩薩峠第五編」の初盤までに続いたあと、ほぼ全ての文末表現が敬体に落ち着くようになってから無くなる。

以上、【資料1－1】と【資料2－1】に挙げておいた二つの場面が改編された形で単行本化されるのは一九一八年である。その単行本化作業と同時に「大菩薩峠（第五編）」が連載されていたので、当時の文体傾向を確認するためには両方を分析しなければいけないが、先にその改編内容から確認しておく。

その改編は、内容面からいうと仇討ち物・情愛物としての性格を放棄するものであったが、今回は文体の側面から考察するために、同じ内容を異なる形で書いた部分だけを集中的に分析した。その結果、文体変化の趣旨は、文章を簡潔にすること、そして語り手の位相を変化させることだったという結論に至ったので、それぞれ例を示しておく。

【資料1－2】中里介山『大菩薩峠：1　甲源一刀流の巻』（玉流堂、一九一八年二月）

「やれ〳〵頂上へ着いたわい、おゝ、こゝにお堂がござる」／年寄の方の巡礼は社の前へ進んで笠の紐を解いて跪まると／「お爺さん、こゝが頂上かい」／面立の愛らしい、元気もなか〳〵よい子でありました。

まず、【資料1－1】と【資料1－2】を比較すると分かるように、文章の簡潔化は句点の使用や読点の削除、単純な行動描写の削除や体言止めの文章への書き換えなどの方法により行われた。以下、同じ性格の修正例を示しておく。

①（四）瓢を投げ出して、縋りついたのは、老爺の屍骸でした、→甲（三）瓢を投げ出して縋りついたのは老爺の屍骸でした。

②（四）ガッカリと力も折れて、また老爺の亡骸に縋りついて泣き崩れます、↓甲（三）亡骸をかき抱いて泣きくづれます。

③（九）素気なき答へ方であるので、↓甲（五）素気なき答へ方、

④（二十一）与八の手には一封の手紙がある、何人からの消息であらう、龍之助は受け取つて見ると、意外にも女文字で、↓甲（一〇）与八の手には一封の手紙、受取つて見ると意外にも女文字

⑤（一〇六）ぼんやりした、行灯の光が、器を出す途端に面と面とを合はした、主婦とみどりとの間を照らすと、↓鈴（三）行灯の光で器を出す途端に面と面とを見合せた屋台店のお神さんとみどり

⑥続（四十七）鉄漿をつけた歯並の間から、洩るゝ京言葉の優しさ

⑦続（八十三）力を極めて芹沢を突き飛ばして、見たところで、知れたものです、芹沢の腕は、いよ〳〵固く、大蛇が兎を締めたやうに、藻掻けば藻掻くほど、強くめり込む、↓壬生（十四）力を極めて芹沢を突き飛ばしてみたところで知れたもの、芹沢の腕は、大蛇が兎をしめたやうなもの、

⑧続（九十九）大和は古蹟と名所との国であります、（…）道々古道具屋で、どうやら身に合ひさうな刀を求めて鞘だけを役に立て、それに今までの刀を仕込んで、たゞ一本、差して居るのが今のそれです、↓壬生（十六）大和は古蹟と名所との国。（…）差してゐるのは只一本の刀。

⑨龍神（二十九）ここは針ケ別所といふ所の奥の奥であります、山と山との重なり合つた谷合に、半分は洞穴になつた処へ、杉の皮を葺き出して、前には鹿の飲むほどな谷の流れがある／無論、こゝまで来て見ねば、小舎も流れも、何処からも見えはしない、こゝまで来るのでさへ、道といふものはついて居ないのです　↓

三輪（十八）ここは針ケ別所といふ所の山の奥の奥。谷合の洞穴へ杉の皮を葺き出して、鹿の飲むほどな谷の流れを前にした山中の小舎。

①はそれぞれ読点の削除の例、②は単純な動作描写の削除の例であるが、この例のみならず、例えば同日の連載分では「立ち上がつて」「振り返ると」「周章く」など、動作を指示するような部分がほぼ削除されている。さらに③～⑨に挙げておいた例は、全て体言止めに書き換えられた部分であるが、それによって既存の冗長さがなくなったのである。

次は、語り手の位相変化が窺える例である。

①（二十）「七兵衛さん、〳〵」／と呼ぶ声がします、こゝの主人の名は七兵衛といふ名であつたので、
↓甲（九）「七兵衛さん、〳〵」／表口で呼ぶ。こゝの主人の名は七兵衛といふのであるらしい。

②（五十四）こゝに少しく、七兵衛といふものの性質を伝へませう。／この物語の最初以来、甲州から武州並びに関八州を荒し廻った盗賊といふのは、大方はこの七兵衛の仕業です、
↓甲（二十）七兵衛は変つた盗賊です。／この物語最初以来、甲州から武州、並に関八州を荒し廻つた盗賊といふのは大方はこの七兵衛の仕業でした。

③（六十三）何処をどう歩いて来たか、その日、夕陽の斜なる頃、上野の山下から、御徒町の方に歩みを運ぶ机龍之助の姿を見かけました。
↓甲（二十三）何処をどうして来たか机竜之助は、その日夕陽の斜なる頃、上野の山下から御徒町の方を歩い

てゐました。

④続（四十三）読者は、こんな事を聞くのを馬鹿々々しく感ずるでせう、記者も、こんな事を書き立てるのは不本意ですけれども、（削除）

⑤続（五十五）人と人と向き合つて話したことでさへ、それが伝はる場合には丸つきり違ふことがある、こんな風に伝へられた七兵衛の伝説の、すべてが事実であると、記者には保証が出来ないのです、けれども ↓

壬生（十）（削除）

⑥続（九十九）龍之助の為に、最もよい行き道は死ぬことでありませう、遅いには遅いが、こゝらで自殺してもよからう、また進んで兵馬の手にでも討たれたなら、幾分か死に花も咲くといふものであらう、／併し、人は業が尽きない限り死にたくとも死ねない、龍之助は、まだ自分で死にたいとも思はないし、まして人に討たれやうなどゝは思つて居ないのです、（…） ↓壬生（十六）（削除）

①の場合、「であったので」が「であるらしい」に修正されることによって、全てを知っていた語り手が限定的な情報を持つ語り手に変化している。また、②と③ではもともと物語内部の情報を伝えたり、見かけたりする、人格を持ったような語り手の自明な存在感が、修正によって消えていることが分かる。次に④と⑤を見ると、初出において語り手が「記者」を自称して直接顔を出していた部分が、単行本版では削除されている。最後に、⑥に挙げた例は語り手の挿評のような言説であるが、これも単行本版では削除される。以上に挙げた例の他にも、語り手が人格を持っているかように思われる部分が多数修正・削除されている。

【資料2－2】中里介山『大菩薩峠：5　龍神の巻』（玉流堂書店、一九一八年一一月）

龍神の社には八大龍王のうち、難陀龍王が祀ってあります。／こんな山奥に龍神を祀ることが奇妙といへば奇妙である――今を去ること幾百年の昔この地に龍神和泉守といふ豪族が住んで居た。その屋敷のあとは、今もあるといふ事であります。／龍神の姓は其の人以前からあつたものか、その人が来て、龍神の社の名によつて其の姓をつけたものか、その辺はハッキリしません。（…）一村の安否の鍵がそこに預けられてあるやうに信ぜられて居るのであります。／お豊は事実清姫の帯を見た――聞いて見れば怖ろしい事である、どうやら其の怖ろしいものを見たのは自分一人だけであるらしい。

ところで、常体と敬体の混用が目立っていた【資料2－1】からの修正内容に関しては、次の三、のところと時期と論点が重なるので、【資料2－1】と【資料2－2】を比較しながら簡単に確認だけしておきたい。ここで常体で書かれていた多くの文章が敬体に修正されるようになるが、【資料2－1】の引用部を含む同日の連載分の場合、敬体の割合は十二％から八十一％に増えるようになり、過去形も多少増えて十二％から三十七％に増加する。

以上に述べた改稿内容を参考にしながら、同時期、即ち一九一八年前後の連載分の文体を確認していきたい。

三、文末表現を敬体で統一し、主に過去形を使用した時期（第五回連載「大菩薩峠（第五編）」中盤まで）

【資料3－1】中里生「大菩薩峠　第五編」（三〇六）『都新聞』一九一八年一一月三日

この屋敷は甲府を離るゝこと半里躑躅ヶ崎の古城跡にある荒れた大きな屋敷でありました。さうして此の屋敷の

持主は神尾主膳であつて、主膳は前の持主が住み荒したのを買ひ取つて下屋敷のやうにしてゐました。けれども主膳自らは此処に来ることが甚だ稀であつて番人に任せて置いたから、いよいよ屋敷は荒れてゐました。それを此の頃になつて主とも客ともつかぬ者が一人出来た。それは此の机竜之助でありました。／神尾主膳が何故に机竜之助を此処へ置いたかといふことは、まだ疑問でありましたけれど、此処へ置かれた机竜之助は、囚人でも監禁の姿でもありませんでした。

【資料4－1】中里生「大菩薩峠　第五編」（三七二）『都新聞』一九一九年一月九日

不思議なのは其れのみではありませんでした。米友が何故に遽に真剣になつて槍を構へたか、米友自身もそれは知ることが出来ませんでした。／殊に其の通りの五里霧中にあつて鼻の先に現はるゝものさへわからない時に、其処に何者かゞあつて米友を驚かせたものとすれば、それも不思議でありました。／たゞ米友の槍を構へた其の形だけを見てゐれば、例の運慶の刻んだ十二神将のやうな形が、様々に変化するのでありました。十二神将が十二神将に止まらず二十八部衆にまで変化するのでありました。槍を挙げて、あ、と云つて散指の形をして見せました。やゝ遠く離れて槍を抱へては摩醯修羅の形をして見せました。またそろ〳〵と懸りの槍を入れた其の眼は難陀龍王のやうに光るのでありました。

右記資料のように一九一八年頃における連載分の地の文は、ほぼ全て敬体で書かれている。これはなるべく常体を排除して読者より下の、一貫した立場から物語を統率する語り手が確立されたことを意味する。主知のように言文一致の成立期には二葉亭四迷の「だ」調以外に山田美妙の「です」調、嵯峨の屋お室の「であります」調など、

「言文一致」をめぐる様々な試みがあったが、敬体での試みは主流文学に受け入れられなかった。それについて多くの論者は、語り手の引き下がった位置のために、語りの中立性・現前性を仮構出来なかったためだと評価する。それにも関わらず、一九一八年の時点で常体を排除して再び敬体を使う方向に進んだのは、むしろその物語を介在している語り手の存在を目立たせようとする介山の意図的な試みだったと評価できる。

さらに、連載第一期である「間の山」以前に比べて過去形の割合が圧倒的に増えたことにも注目すべきである。例えば【資料3－1】を含む一九一八年一一月三日の連載分は八十％、【資料4－1】を含む一九一九年一月九日の連載分は一〇〇％の地の文が過去形で書かれている。

ここで、小説において過去形の文末表現がどのような機能をするかについて考えてみたい。小説における過去形は、そのまま作中の時間を表す側面も基本的に持ってはいるが、過去形と現在形がそれぞれ話素と描写の役割を担っていう見方[3]、また、過去形は物事の対象化機能を持っているという見方[4]、さらに「た」が「中立的な言語空間を存立させるための三人称の形態表示」であるという見方[5]など、論者によってその論点は多少は重なりながらも異なっている。しかし、それらはいずれも『浮雲』以来小説作品において使用の頻度が高くなった「た」という文末詞が、小説における〈語り手〉の位置、あるいは意識の位相を聞き手に表出するものとして機能すると理解した点、つまり「た」という過去形が時制を表すだけでなく、小説のモダニティにおいて重要な役割を担っていると見た点では意見を共にしている。以上の論を参考にし、連載当初はあまり使われなかった過去形が、一九一八年頃になって増えたということの意味について考えてみたい。

幕末を舞台とする本作品に過去形が使われるのは、それを時制詞として捉える場合当然なことであるが、連載当初はむしろ現在形の方がより多く使われていたのに途中で時制の塩梅が変わったという面からすると、本作品の過

去形は明らかに時制詞であるだけでなく、語り手の変質を示すものと見て良い。

一九一八年頃の連載分の語り手は、「やうに見えました」「やうでありました」のような文末表現からして、物語の内部事情を限定的にだけ知っている。また、作中の出来事について「不思議でありました」「疑問でありましたけれど」などと評する部分からも、語り手は物語の内部世界を不思議がったり疑ったりしながら対象化して、その世界を外部から語っている。つまり語り手は、物語の中にいながら見聞したことを伝える役割を担いながらも、過去形を使うことによって物語を対象化し、その内部世界が中立的な空間（であるかの如き虚構）を作ろうとしているのである。

四、敬体過去形や現在形を混用した時期（第五回連載「大菩薩峠（第五編）」中盤以降）

【資料3－2】中里介山『大菩薩峠　第六冊　第十二巻』（春秋社、一九二一年一〇月）

この屋敷は甲府を離るゝこと半里躑躅ヶ崎の古城跡にある荒れた大きな屋敷でありました。さうして此の屋敷の持主は神尾主膳であつて、主膳は前の持主が住み荒したのを買ひ取つて下屋敷のやうにしてゐました。けれども主膳自らは此処に来ることが甚だ稀であつて番人に任せて置いたから、いよいよ屋敷は荒れてゐました。それを此の頃になつて主とも客ともつかぬ者が一人出来た。それは此の机竜之助でありました。／神尾主膳が何故に机竜之助を此処へ置いたかといふことは、まだ疑問でありましたけれど、此処へ置かれた机竜之助は、囚人でも監禁の姿でもありませんでした。

【資料4－2】中里介山『大菩薩峠　第七冊　第十三巻』（春秋社、一九二一年一二月）

不思議なのは其れのみではありませんでした。米友が何故に遽に真剣になつて槍を構へたか、米友自身もそれは知ることが出来ませんでした。／殊に其の通りの五里霧中にあつて鼻の先に現はるゝものさへわからない時に、其処に何者かゞあつて米友を驚かせたものとすれば、それも不思議でありました。／たゞ米友の槍を構へた其の形だけを見てゐれば、例の運慶の刻んだ十二神将のやうな形が、様々に変化するのでありました。十二神将が十二神将に止まらず二十八部衆にまで変化するのでありました。槍を挙げて、あ、と云つて散指の形をして見せました。やゝ遠く離れて槍を抱へては摩醯修羅の形をして見せました。またそろ〳〵と懸りの槍を入れた其の眼は難陀龍王のやうに光るのでありました。

（引用者注：便宜のため、新聞初出テクストの上に単行本版における修正部を示しておいた。）

主に過去形が使われていた三、の時期から約三年後である一九二一年に出た単行本版を確認すると、内容は全く同一でありながら、現在形・過去形をめぐっては細かな修正が加えられている。具体的な数値でいうと、【資料3－1】を含む連載分では二十％しか占めなかった現在形の割合が単行本では五十七％に増えており、【資料4－1】の連載分や同じ内容を含む単行本版を見ると〇％から五十二％に増えている。このことは、介山が現在形や過去形の使い方をめぐって、ひいては語り手の位置設定をめぐって試行錯誤を繰り返していたことを意味すると言える。

ここで過去形と現在形の性格を明らかにするために、近代文学の文体を完成したと言われる「た」や「である」の関係をめぐる議論を参考にしてみたい。絓秀美氏は、「非人称的で透明な話者とその語りの現前性」という、「小説的モダニティの二要請」を満たすためには過去の事を表す過去形が必要だったとしながら、物語が現前的である

かの如き虚構を生成するためには「た」体のみならず「である」という現在形が併用される必要があったという[6]。「である」体の確立によって言文一致体が確立されたということは、紅氏のみならず多くの学者が同意する点で、その際事例として挙げられるのが一八九六年尾崎紅葉による『多情多恨』や二葉亭四迷による『あひゞき』の改訳である。

しかし、「大菩薩峠」は主に敬体で書かれており、「であります」「でありました」などの現在形、つまり、（紅氏の表現を借りると）一人称性を帯びた判断・陳述的表現は連載当初からも使われて来た。また、ほぼ敬体で書かれているが故に、読者に向けて発話されているとも言える本作品には、文壇文学で起こった文体完成の過程とは異なる原理が作動しているはずである。

ところで、敬体過去形そのものの特性を考えると、「でありました」を含め「でした」「ました」は、語り手が物語の外部に位置することを示す指標で、語り手にとっては物語世界を対象化しやすい文末表現である。ただし、常体過去形と違って敬体過去形を使う場合、顕在化されるのは、物語言説や物語内容の間の距離というよりも、語り手と対象世界との距離だと言える。しかしそこに現在形が混用される場合、語り手は明らかに過去の時空間である物語世界の〈現在〉にも、そして作品が読まれている〈現在〉にも参入できる存在であることが示される。それは現在形が、過去形の持つ物語世界の対象化機能とは対照的に、対象と一体化する機能を持つことをも意味する。したがって、過去形と現在形の混用により語り手は、読者にとって不透明でありながらも超越的な性格を持つようになり、上演＝再現の役割を担っていた語り手そのものが現前性を帯びて来る。つまり介山は、現在形の割合を高めることで語り手の役割を再調整し、（物語世界ではなく）語りそのものが今、ここで語られている如き虚構の場を作ろうとしたのだと言えるのではないだろうか。

そして主に敬体過去形・現在形を混用する文体基調が立った一九二一年頃以来、単行本化の際の修正はほぼなくなる。このような文体基調に基づき、『大菩薩峠』の連載は一九四一年まで断続的に続いていった。ただし、常体や体言止めの文末表現も場合によって有効に使われたことには注意を払う必要はあり、それが如何なる場面において、どのような機能をしているかに関してはまだ研究の余地がある。

おわりに

これまでの考察は「大菩薩峠」の文体の変遷過程を、その単行本化の際の改稿内容とともに追ってみる試みであった。具体的にその過程は、①句点を使用せずに口演体で書いていたのを、②句点の使用・読点の一部削除・体言止めの使用により簡潔に整え、③一時常体と敬体を混用し、過去形の割合を高めたのち、④ほぼ全ての文末表現を敬体で統一し、過去形や現在形を適切に併用する形で落ち着くものであった。以上のような文体上の変化は、物語における語り手と読者の位置をも変化させた。結局、単行本化の際における大幅の修正・削除作業は制作上、あるいは物語上の理由のためだけでなく、文体変更の意図――即ち、語り手と読者の新たな位置設定の意図――を持って行われた可能性が、本発表によって確認できた。

今回の考察で確認したように、「記者」を自称しながら実体としての存在感を表していた語り手が、機能的な装置に変化していった点からすると、文学史でいう小説の「近代性」を帯びてきたという評価も出来るだろう。それは文字言語性を高めていく中での文章の論理化とも関わっているはずだが、その反面、一九一〇年代において既に成立していた「文壇」が流行の文体をつくり、それがある種の慣習として機能する中で、「語り」の仕方、つまり語り手の位置や役割を再検討したという点こそ、介山文学の評価すべき点であると思われる。

ただし、今回の発表は地の文のスタイルだけに焦点を当てたので、会話文における文体変更、また内容の変化との関連性も検討する必要がある。また、新聞から単行本への媒体移動が作者意識にもたらした影響や読者たちのリテラシー水準の変化、それによる享受方式の変化や標準化されていった日本語の言語学的変化など、今回考察した文体変更の裏にある様々な背景事情に関しては、今後の課題として研究していきたい。

【注】

①尾崎秀樹『大衆文学論』（勁草書房、一九六五年六月）
②ウォルター・J・オング著、桜井直文・林正寛・糟谷啓介訳『声の文化と文字の文化』（藤原書店、一九九一年一〇月）
③三谷邦明「近代文学における叙述の装置」『文学』一九八四年四月号
④亀井秀雄「話術の行方」『文学』一九八五年十一月号
⑤野口武彦「三人称の発見まで　7」『批評空間』第一期第十一号　一九九三年一〇月
⑥絓秀美「写生における「長さ」と「難解」」『批評空間』第一期第十一号　一九九三年一〇月

＊討論要旨

関礼子氏は、介山が多様な文体を使用したことは、同時代の他の大衆文学の作家たちと比較して特殊なことであるのか、と質問した。発表者は、『都新聞』に掲載された他の作家たちとの比較調査の結果に基づき、次のように回答した。『都新聞』には一面と三面に連載読み物が掲載されており、一面は当時の文壇の主流をなす常体の過去形、三面は講談速記の形式で書かれている。「大菩薩峠」は一面に掲載されたにもかかわらず、三面の文体に近い。また、歴史を題材とする小説のなかでは、「大菩薩峠」のような文体上の工夫を行ったものは珍しい、と回答した。

関氏はまた、文体という物語形式上の変化が世界観やテーマなど物語内容の展開によって生じた可能性について質問した。同様に、河村康博氏は、文体の変更が介山の大乗小説への志向と関連している可能性を指摘した。発表者は、現時点では仮説にとどまるとしながらも、物語が多くの登場人物や時事を取り込んで膨らんでいくにしたがい、実体としての語り手が物語を統御しきれなくなったのではないか、と回答した。

【表】書誌情報：「大菩薩峠」の連載・単行本化状況

題　目	連載時期	単行本	改編時期（*）	(最初の)単行本の刊行日	出版社
大菩薩峠	1913年９月12日～1914年２月９日（全150回）	甲源一刀流の巻（連載第１～98回分）	「間の山」執筆時	1918年２月10日	玉流堂
大菩薩峠（続き）	1914年８月20日～1914年12月５日（全108回）	鈴鹿山の巻（連載第99～150回、（続）の15回分）	第五編冒頭	1918年４月15日	
		壬生と島原の巻（連載第16～108回分）	第五編序盤	1918年７月４日	
龍　　神	1915年４月７日～1915年７月23日（全108回）	三輪の神杉の巻（連載第１～66回分）	第五編序盤	1918年９月15日	
		龍神の巻（連載第67～108回分）	第五編中盤	1918年11月７日	玉流堂書　店
間 の 山	1917年10月25日～1917年12月30日（全67回）	間の山の巻（連載第１回～67回分）	第五編中盤	1919年２月（**）	
大菩薩峠（第五編）	1918年１月１日～1919年12月17日（全715回）	東海道の巻（連載第１～65回分）	第五編終盤	1919年８月27日	
		白根山の巻（連載第81～120回分）	第五編終盤から終了後	1920年３月21日	
		女子と小人の巻（連載第66～80、121～170回分）	現代小説「雪路」連載時	1920年６月15日	
		市中騒動の巻（連載第171～228回分）	第六編連載時	1921年６月15日	
		駒井能登守の巻（連載第229～278回分）	第六編連載終了間際	1921年９月10日	春秋社
		伯耆の安綱の巻（連載第279～323回分）	第六編連載終了間際	1921年10月10日	
		如法暗夜の巻（連載第324～393回分）	連載終了後	1921年12月20日	
		お銀様の巻（連載第394～476回分）		1921年12月20日	
		慢心和尚の巻（連載第477～543回分）		1922年３月26日	
		道庵と鰡八の巻（連載第544～617回分）		1922年３月26日	
		黒業白業の巻（連載第618～715回分）		1922年５月17日	
大菩薩峠（第六編）	1921年１月１日～1921年10月17日（全290回）	安房の国の巻（連載第１～77回分）		1922年５月17日	
		小名路の巻（連載第78～180回分）		1922年７月15日	
		兎門三級の巻（連載第131～143、181～275回分）（第276回連載分からはほぼ削除）		1922年７月15日	

（*）：伊東祐吏『「大菩薩峠」を都新聞で読む』（論創社、2013年５月）p191参照。伊東氏は「単行本の改編時期については、『都新聞』での連載の余白で介山自身が語る新巻の進捗状況や発売の予告などから推測するかたちで示した」と言う。

（**）：玉流堂書店から出た「間の山の巻」の初版に関しては連載中、単行本刊行の予告などで存在が認められるものの、実物は確認出来なかった。（玉流堂書店版の重版は1920年５月８日に出ている。）